知事インタビュー interview

全国に先駆け、1992年には「福祉のまちづくり条例」を制定し、社会のバリアフリー化に向けた取り組みを始めた兵庫県。井戸敏三さんは副知事を経て、2001年に知事に就任して以降、従来の福祉のまちづくりを発展させて、震災の経験で培われた支え合う文化を活かした政策を次々に行い、常に注目を集めている。震災から10年の節目に2期目を迎え、「元気なひょうご」を掲げる知事にUD政策を中心にお話を伺った。

いど　としぞう●1945年、兵庫県生まれ。1968年、東京大学法学部卒業。同年、自治省入省。1995年、自治大臣官房審議官。1996年、兵庫県副知事。2001年8月より現職（2期目）

誰もが主体的に生き、支える社会をめざして

「ひょうごユニバーサル社会づくり」

兵庫県知事　**井戸敏三**氏

聞き手　**梶本 久夫** 本誌編集長

『ユニバーサルひょうご』vol.1
（2005年8月発行）
「ひょうごユニバーサル社会づくり総合指針」の内容やNPO、学校、企業などの実践活動を紹介する情報誌

誰もが気軽に声をかけ手助けを行う県民運動、「障害のある方への声かけ運動」推進員による街頭パレード

震災からの創造的復興の経験を活かし、誰もが能力を発揮して参加する社会づくりをめざす

兵庫県では今年、「ひょうごユニバーサル社会づくり総合指針」を作成し、取り組みも始められていると伺っています。

井戸　震災からの復旧・復興の経験から、兵庫県では地域ぐるみのさまざまな活動が展開されています。身近で気軽に健康相談が受けられる「まちの保健室」や住民グループ等による「高齢者等の見守りシステム」など県民の声から生まれたものです。お年寄りや乳幼児、障害者などのハンディのある方は、社会として支えていかなければならないという意識が県民のみなさんに浸透しています。震災の経験を通して、人と人がつながって、お互いに助け合う、そうした絆が地域社会を支えているということに気づかされました。

2003年からは、障害のある方がもっと気楽に外出できるような環境づくりをめざし、県民運動として「障害のある方への声かけ運動」を行っています。「お手伝いしましょうか」と声をかけることで、障害のある方も、ない方も、お互いを尊重し、助け合って暮らす社会づくりにつながればと考えています。こうした活動の積み重ねが指針には凝縮されているのです。

指針では「ひと」「もの」「情報」「まち」「参加」の5つの基本目標をつくっています。「ひと」は誰もが支え合い、尊重し合うということ。「もの」は量と質の両面で豊かであること。「情報」は、誰もが理解しやすい情報を手に入れ、交換できる社会のシステムを構築することです。「まち」は、個人の生活環境の問題も含めてUDやバリアフリーに気をつけたまちづくりを進めていく。「参加」は、自分の持っている能力を最大限に活用して社会に参加してもらう。誰もが社会の構成員としての役割を果たしていくということ。この5つを揚げています。

指針を実行するにあたっては、県民一人ひとり、そして地域団体、企業、NPOなどあらゆる方々に主体的に取り組んでいただくことが大切です。県では「ユニバーサル社会づくりひょうご推進会議」で、広くみなさんの意見を取り入れるとともに、会員のそれぞれが率先して行動し、できるところから取り組みを始めています。

魅力あふれる商品の創造で、障害のある人の雇用を創出

障害のある人たちの働く場をいかにして確保していくか。この取り組みも大切になってきますね。

井戸　障害を持つ方たちの働く場を確保するにはまず、彼らが働く授産施設や小規模作業所でつくられる製品が一般消費者に買っていただけるようになることが重要です。

そのためには、授産施設や作業所でつくられる製品をよりよいものにすることが必要で、作業の指導員を巡回させるなど、製品の品質向上を促進しています。もうひとつは、製品をもっと知ってもらうことです。「ぬくもり」という共通のカタログをつくり、インターネット販売にも取り組んでいます。

県下のユニークな取り組みのひとつに、「CCP（チ

ITを活用して、生き生きと働く人たち

季節の花を販売する園芸部

笑顔で仕事をする人たち（いずれも西宮市の身体障害者授産施設「新生会」作業所）

ャレンジド・クリエイティブ・プロジェクト）」があります。これは（社福）プロップ・ステーションと通信販売会社のフェリシモと県などが協力をしまして、授産施設や小規模作業所でつくられる製品の品質の向上と販路拡大に取り組んでいます。単に障害者施設の製品だから買うというのでは将来の販路拡大等に結びつきませんから、作業所とフェリシモのプランナー、協力メーカー、アーティストらが「さをり織り」雑貨やうずまきクッキーなど１００を越える商品を共同開発しています。一般の商品と競争できる製品に育て、買っていただくことが大切なのだと思います。障害のある人が働ける施設の活性化は、ユニバーサル社会づくりのための重要な要素で、県として取り組みに力を入れているところです。

少子化を考える3つのキーワード

これからの少子高齢社会に向けた取り組みについて、お話を伺えますか。

井戸　少子化に関しては3つの側面があると思います。子どもの数が減っているという「量」の問題。いい子に育ってもらわなければならないという「質」の問題。もうひとつは、高齢者の数と子どもたちの数がバランスを欠いているという「社会構成」の問題です。この3つが小子化問題を考える際には重要です。しかしこの問題は、複雑に社会全体に絡み合っています。県では8月25日に知事を本部長とする全庁横断組織「兵庫県少子対策本部」と理事（少子対策担当）、少子局を設置しており、今後、県全体として総合的に取り組んでいきます。

今年9月には、緊急的な対策として、事業所内保育所の整備や保育所の分園化に対する助成制度を創設しました。また、保育士のみなさんが幼稚園教諭の資格を取得するための研修会を行う等、安心して子どもを預けられる仕組みの充実など、やれるところから取り組みを始めています。

これからは人口も減少の中で、高齢少子化が進みます。高齢者も障害のある方も社会参加をして、社会の中で役割を果たす。そういう時代を迎えるのだと思います。そのための仕掛けとか環境整備を進めていかなければなりません。

イベントを通じて、互いに支え合う社会の心を発信する

ユニバーサルデザインに対応した「イベント実践マニュアル」もつくられていますね。

井戸　県内のイベント開催にあたり、ユニバーサルデザインの考え方を取り入れ、誰もが参加・参画して楽しめるための「ユニバーサルデザイン対応イベント実践マニュアル」を作成しており、障害のある方と健常者が互いに支え合うイベントが盛んに開催されています。

昨年の12月、「伝えたいことがあります」をテーマに「全国障害者芸術・文化祭」を開催しました。このテーマは、障害のある方が、健常者、そして同じ障害をもつ方に伝えたいこと、健常者が障害のある方に伝えたいこと、お年寄りが子どもたちに伝えたいこと、子どもたちがお年寄りに伝えたいこと、それぞれが相手に伝えたいことがあるという多義的なテーマです。お互いの違いを理解し、自分がやれることとできないことを理解したうえで、やれることをやって、お互いに支え合う。そういう社会づくりが大切だということです。このイベントを通じてユニバーサル社会に対する理解を深めることができたのではないかと思っています。これがきっかけになって、今年12月には、「兵庫県障害者芸術・文化祭」を県立芸術文化センターで開催します。

もうひとつ非常にユニークでほほえましい活動を展開されているのが「楽団あぶあぶあ」というダウン症などの知的能力にハンディがある方たちのミュージカル・グループです。彼らが歌を歌ったり、踊りを披露してくれたりするのですが、これまでたいへん多くの方がコンサートに訪れています。昨年の「全国障害者芸術・文化祭」に続き、今年1月に行われた「国連防災世界会議」のパーティにも出演していただきました。そこで「人類はみな兄弟なのだから、助け合おう」というメッセージを伝えたいという想いからです。これも大好評でした。

来年は「のじぎく兵庫国体」と全国障害者スポーツ大会「のじぎく兵庫大会」が開催されます。震災のときに支援していただいた全国の方々への感謝の気持ちもこめて、創造的復興を成し遂げようとする兵庫県をアピールできればと考えています。

知的能力にハンディのある人たちの「楽団 あぶあぶあ＆ミュージカルチームLOVE」。今年1月の「国連防災世界会議」のパーティでも演技を披露した

ダウン症や自閉症などのため、言葉の苦手な人も多く、身振り手振り、まなざしで心を通わせて、友情、勇気や祈り、よろこびを表現する

兵庫県立芸術文化センターでは赤外線発信による聴覚補助を行うためのシステム、骨伝導ヘッドセットとタイループが導入されている

県立芸術文化センター。2005年10月22日オープン